教団新報

定　価　1部220円（本体200円〒共283円）
予約購読料　1年分　〒共　3,962円
紙代のみ　3,080円
振替 00140－9－145275
本紙を購読ご希望の方は、前金をそえて、お近くのキリスト教書店へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所　日本基督教団
169-0051　東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内　電話03（3202）0546
FAX03（3207）3918
URL http://uccj.org
発行人　網中彰子
編集主筆　嶋田恵悟
印刷所　株式会社きかんし

第43総会期 第4回 常議員会

出版局に関する協議会

機構改定、教団総会の規模縮小について協議

第43総会期第4回常議員会が7月7～8日、教団会議室にて、開会時常議員30名中29名の出席で開催された。

書記報告では黒田若雄書記が出版局経営改善会議の立ち上げ、各教区総会への問安使派遣等について報告した後、第43回教団総会での3件の発言について触れた。この発言については第1回常議員会にて指摘され、三役に取り扱いが託されていた。今回は発言録を議場に配布して議論し、再び三役持ち帰りとして第5回常議員会で取り扱うとした。これについて議場からは「教会会議において聖霊を否定する発言にその場で対応できなかったことは悔い改めなければならない」、「総会での発言を後日の常議員会で取り上げるのはフェアではない」等の発言が出た。また「教団として信仰告白理解の公式の基準が存在していない。これを好機に建設的な歩みを始めて欲しい」との意見も出た。兵庫教区議長として陪席していた、発言者の1人である森なお教師が説明を申し出たが、雲然俊美議長は「発言者3人全員の意見を聞くべき」として、公平性の面から許可しなかった。

総幹事報告では網中彰子総幹事が教会合併・閉鎖の相談件数が増えていること、能登半島地震の被災教会の現状や募金の状況等について報告した。また部落解放センターで起きたアウティング・人権侵害問題について謝罪した。

教団機構改定検討委員会報告では、目的については43回総会で決議された「全体教会としての一体性」を土台として「将来的に予想される諸教会の教勢および財力低下を見通した教団機構の改定を行うこと」と説明された。その上で教団総会についての検討事項、すなわち全体的に削減に向かうことや議員数の適正規模、推薦議員削減、教規第2条の「各教区は教師、信徒各3名をとり」の条文に対する考え、事務経費について議場に意見を求めた。議場からは「地方の声を届ける仕組みが必要」、「教団総会議員は教区代表ではない」、「沖縄教区不在で決めるべきことではない」等の発言があった。

信仰職制委員会報告では洗礼式、按手礼、准允式執行の「指針」が提示され田邊由起夫委員長は「『口語式文』、『新しい式文』、『試用版』という出版局から出されている三つの式文の使い方にアドバイスするために提示する」と述べた。特に試用版における洗礼式文の「感謝聖別祈祷」の中には、プロテスタント神学では認めていない「水の聖別」（物素エピクレーシス）の祈りが含まれていることを指摘し、できるだけ早く委員会名で「指針」を出すべきであることを告げた。その上で、今常議員会で諸教会に配布することを承認してほしいと述べた。

議場からは「教派的伝統によって式文の扱いは異なるので慎重な話し合いが必要」等の意見が出た。雲然議長は「教団がオーソライズしている式文は口語式文のみ。それ以外のものに常議員会がコメントするのはカテゴリーエラー」と述べた。そして洗礼式執行指針については三役が預かり、按手礼・准允式執行指針については常任常議員会に附託することとなった。

（米山恭平報）

夏期一斉休暇のお知らせ

教団事務局と年金局は8月6～8日、出版局は8月7～8日となります。

総幹事　網中彰子

出版局

事業縮小、業務体勢改編等の取り組みを進める

一日目の議事終了後、出版局に関する協議会が開催された。飯塚拓也理事が資料を基に現状を報告。冒頭、2024年度決算の貸借対照表において、資産合計2億4014万3217円に対して負債合計が2億5417万2455円となり、1402万9238円の債務超過となったことを告げ、「一刻の猶予もない状況であり、対応が急がれる」と述べた。また、出版局がキリスト教出版業界に与える影響は少なくなく、出版局職員の生活を守る責任も担っていることに触れつつ、「現状のままでは継続は不可能。このような状況になったことを申し訳なく思うが、今年度中の業務縮小を提案し、多くの知恵を集めてよい道を求めたい」と述べた。

また、網中彰子局長代行からは、事業縮小は約4分の1であること、職員が過重労働の状態で励んでいること、職員にも簡単な状況でないことは伝えていること等の報告があった。

二日目、24年度出版局事業報告ならびに決算承認に関する件の中で、高橋潤理事長は、現状に至った一因として、1966年に出来た出版局規定を見直すことなく続けて来たこと、課長会に経営を含めて全てを委ね、理事会は報告を聞いて承認するだけであったこと等を指摘、理事会が管理責任を充分に果たせなかったことを詫びつつ、「今後、諸教会に迷惑をかけずに、縮小しつつ経営改善案を作成して行けるかどうかが問われている」と述べた。

これらを受けて、「出版局経営改善に関する件」を審議し、危機的状況にある出版局について、「常議員会の責任において、事業縮小、業務態勢改編等の取り組みを進める」ことを決議した。協議の冒頭、雲然俊美議長は、「常議員会の責任」を明確にしたことが重要であることを告げ、「これまで2014年からの赤字を踏まえ2019年から経営改善の取り組みを続けて来たことの背後には職員の努力があったことは忘れてはならない。教団の文書伝道を担う出版業務をどのようにしたら守れるかを検討することが、事業縮小、業務態勢改編の内容」と述べた。また、今後の進め方について、決断を早く行うために、経営改善会議で決定し常議員会に報告をするという形で進めること等を告げた。

（小林信人報）

財務関連

財務関連議案すべて承認

常議員会二日目、財務関連議案を扱い、24年度決算、24年度第2次補正予算、25年度第2次補正予算、各センター決算、出版局・年金局決算等を承認した。

予算決算委員会報告の中で宇田真委員長は、24年度、25年度いずれにおいても、部落解放センターの人件費等に充てるための「繰出金」を200万円増額する補正を行ったことを報告した。このことを受けて、人件費は教団会計本体からではなく、センター会計から支出し、教団は必要に応じて補助金を出す形にすべきとの意見があった。

2024年度決算で、宇田委員長は、「常設委員会費」、「宣教関係費」が、多くの会議がオンラインで行われたことにより予算より大きく下回ったことで、事業活動収支差額は2030万円の差益、経常会計全体では、2241万円の差益となったことを報告した。

24年度部落解放センター決算で、鈴木祈運営委員長は、活動献金は690万円の予算に対して396万円程だったものの、カナダ合同教会からの600万円等指定献金があったこと、支出において、アウティング問題に対応する第三者委員会調査費等により、「委員会費」が予算を大きく上回ったものの赤字決算とはならず、次年度繰越金546万円となったこと等を報告した。

年金局決算報告で、中川義幸局長は、24年度も年4回定例給付を行い、退職年金を1回につき704名程に年間合計4億3699万円を給付したこと、給付が掛金を1億3672万円上回ったものの諸献金9600万円と資産運用益7081万円があり、結果、3385万円の差益で終えたことを報告した。

「伝道資金運用に関する件」では、藤盛勇紀委員長は、例年通りの運用資金規則を提示した上で各教区の負担金（案）を提案、承認した。

「戦後80年にあたって平和を求める祈り」に関する件では、小堀康彦作成委員長が70年の祈りを参考にしながら話し合いを持ったこと、方針として、全てのキリスト者が祈れる祈りを考え、具体的な戦争・内戦については言及しなかったこと等を報告した。文言を加筆、修正した上で承認した。

（新報編集部報）

教区総会報告 ④　2025年度　神奈川

准允・按手礼式において教団信仰告白を告白

按手礼・准允受領者。左から、細井宏一、進宏一、小倉仁史各牧師、飯田輝明議長、眞木重郎伝道師

6月21日、第155回神奈川教区総会が清水ヶ丘教会を会場に開催された。議員数225名中161名が出席した。

議事は第1号として前回可決された修正案と同様の「今回の教師試験が不当とまでは言えない」という議案、第2号に「按手礼・准允式において教団信仰告白を告白する件」が、その後第3・4号に准允執行と按手礼執行が提案された。議場からは、第1号と第2号および第1号だけを第4号の後に審議する二つの案が提出された。ともに准允・按手礼とは切り離し、影響がないことを明確にすべきというのが主な提案理由だった。両案とも否決され、原案が可決された。

第1号議案の審議では、議論の前提が不十分、すでに進展したことが踏まえられていない、准允・按手礼と結びつける、などの反対意見があり、教師試験についての対立を率直に認めた上での議案であるという賛成意見が出た。賛成多数で可決された。

第2号議案の主旨は、按手礼・准允の権能は教団にあり、それゆえにこれらの式は「教団信仰告白」を告白することを土台とすべきである、ということである（神奈川教区では総会において教団信仰告白の告白はない）。反対意見として、現状では信仰告白をするかどうかで人の信仰を見定められていると感じる、信仰告白について意見の相違がある状態で告白するべきではない、内容はいいが、政治的意図が感じられる、などがあがった。また、議案には反対だが、信仰告白は大切なので、次回から開会礼拝で告白してはどうか、という意見もあった。

賛成意見として、式文に信仰告白に対する誓約があることを重視すべき、さまざまな教派背景の教会が一緒にやっていけるように簡易信条になっており縛るためではなく可能性を持っている。従って教会の窮状を踏まえてぜひ告白してほしい、などがあがった。採決の結果、145名中73名と1票差で可決された。その後の准允・按手礼式中で教団信仰告白が告白された。

（長倉　基報）

▼伝道委員会▲

開拓伝道援助3教会を承認

第2回伝道委員会が6月19日、オンラインで開催された。主な議題は以下の通り。

1．2024年度開拓伝道援助金申請承認の件

長岡教会（関東）、東京新生教会（西東京）、大磯教会（神奈川）、以上申請3教会への問安報告を受け、各180万円合計540万円の援助を承認可決した。

2．「小規模教会」の支援事業に関する件

＊「小規模教会」とは礼拝出席者平均5名未満の教会・伝道所とする。

(1)「こころの友」文書応援伝道…継続

(2)「信徒の友」応援…希望教会に1年間1冊を送付。その後、継続希望の有無を確認する。

(3)「信仰生活応援セット」…現在出版局はこのセット販売を行っていないため今総会期は無し。

(4)伝道推進チラシ事業…小規模教会においてはチラシの制作及び配布も厳しい。教団全体に呼びかけ近隣の複数教会で伝道のためのネットワークを構築し、支援することが目的。

(1)～(3)を承認。(4)は継続審議とした。

3．「日本伝道推進を祈る日」推進の件

毎月第3主日を「日本伝道の推進を祈る日」として、教団各教会・伝道所等において祈りを合わせることを展開・推進する。そのために「信徒の友」への祈祷課題再掲載等を協議した。継続審議

4．「伝道推進を祈る日」献金の振り分けの件

指定のない献金の振り分けを協議した。継続審議

5．第43総会期「教区伝道委員長会議」の件

日程＝2026年2月5～6日、会場＝教団会議室、内容＝「日本伝道の推進を考える（仮）」継続審議

〈お願い〉

伝道委員会は前総会期で働きを閉じた伝道推進室から議題2・3・4を引き継いだが、支援方法の模索を続けている。当事者の声や支援のアイデアをぜひ委員会に寄せていただきたい。

（山口紀子報）

▼予算決算委員会・監査委員会▲

24年度決算等を承認

第2回予算決算委員会を監査委員会と合同で、6月20日に、教団会議室で開催した。

網中彰子総幹事、道家紀一総務幹事、大三島義孝財務幹事からの幹事報告に続き、24年度決算に関する件を扱った。経常会計の当期収支差額は2241万6484円の差益となった。

特に、事業活動収支は収入2億9729万7911円、支出2億7699万6119円となり、2030万1792円の差益となっている。

また、収益事業会計の事業活動収入は1827万5862円となり、執行率82・66％と前年に続き目減りした。特に、会議室料と出版売上等の減少が収益事業会計のキャッシュフローの状況をより厳しいものにしている。

決算報告承認前に、事業活動支出第10款、部落解放センター繰出金を1600万円とする24年度第2次補正予算案について協議し、これを承認した。この後、24年度決算報告を承認した。

続いて、25年度第2次補正予算に関する件を扱った。この補正予算では、事業活動支出第9款第1項、総会準備費を1500万増額し2500万円に、また、事業活動支出第10款、部落解放センター繰出金を200万増額し1600万円とする。また、投資活動支出の退職給付引当資産取得支出を500万増額し1000万円とする。協議の後、この25年度第2次補正予算案を承認した。

次に、年金局、部落解放センター、隠退教師を支える運動、奥羽キリスト教センター、つくばクリスチャンセンター、にじのいえ信愛荘、神奈川研修所、愛知老人コミュニティーセンター（まきば）、兵庫教区クリスチャンセンター、九州キリスト教会館、鹿児島キリスト教センター、沖縄キリスト教センターの決算を取り扱った。

最後に、出版局の決算に関する件を扱った。売上高はほぼ前年並みであったが、売上総利益は5334万8354円で、対前年2570万ほど下回る結果となった。さらに、海外未払印税の約2400万を特別損失計上すると、当期純利益は約6900万円の差損となる。この赤字を解消すべく、局内に倉庫削減チームを発足させ、1倉庫の撤退に向けて動き始めていることを前提に、決算報告を承認した。文書伝道の働きが継続できるよう祈り続けていきたい。

（川村尚弘報）

▼在日大韓基督教会と日本基督教団との宣教協力委員会▲

戦後80年・日韓協約60年を迎えて

6月9日、教団会議室で、第56回在日大韓基督教会と日本基督教団との宣教協力委員会が、「両教会の宣教課題と宣教協力～戦後80年・日韓協約60年を迎えて」を主題として開催された。

在日大韓基督教会からは、梁栄友総会長、張慶泰副総会長、申大永副総会長、李明忠副書記、趙永哲宣教委員長、金迅野関東地方会長、鄭守煥総幹事、金柄鎬幹事が出席した。

教団からは、三役、宣教委員長、在日韓国朝鮮人連帯特設委員長、総幹事、宣教幹事、職員3名が出席した。

雲然俊美議長の説教による開会礼拝、それぞれの報告がなされた。

昼食後、金迅野関東地方会長より、「悔い改めと『いのち』の『ことば』を軸に」との主題で、講演がなされた。自らを安全な場に置かず自分の問題として考えること（「自分を射抜くこと」）の大切さなどについて、語った。

講演を受けて、久世そらち在日韓国朝鮮人連帯特設委員長から、応答がなされた。近代日本の歩みを辿りながら、教会におけるマイノリティとマジョリティの歪みについて触れ、教会はマイノリティに立つ存在であるのではないかと語った。

毎年、両教団の総会長・議長名で発表している「平和メッセージ」の原案が示され、更に検討していくことになった（本紙3面に掲載）。

最後に、梁栄友総会長の説教による閉会礼拝を行い、宣教協力委員会を終了した。

（黒田若雄報）

教団会議室にて

2025年
在日大韓基督教会
日本基督教団

平和メッセージ

2025年　平和聖日
日本基督教団　総会議長　雲然俊美
在日大韓基督教会総会長　梁 栄 友

その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちは、ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸にはみな鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。そう言って、手と脇腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。　（ヨハネによる福音書20章19～20節）

自らが属する国民国家を代表する（represent）のではなく、「平和」が損なわれている世界にあって、イエス・キリストが吹きかけてくださる聖霊を受けた者として、小さくされ深い傷を負い、あるいは命を奪われた人々の声を再一現前する（re-present）者となることを望みます。

この地の表現者が「危機は単層でない」と発言したように、キリスト教界も「混沌とした」状況の中を生きているとの認識のもと、復活のイエス・キリストのからだには十字架の傷がありありと残っていたこと、つまり、復活は、十字架の死を「なかったこと」にしたのではないことをしっかりと胸に抱きつつ、イシューをカタログのように整理することからできるだけ離れて、危機の諸相／諸層に埋め込まれた問いをともに噛み締めたいと思います。

＜戦後80年をめぐって＞

1945年8月15日から80年の時を迎え、この日の名称が「敗戦／終戦／光復」と異なった言葉で表現されることの意味を、そして、その差異はいったい何によってもたらされたのかを噛み締めることができる私たちでありたいと思います。その際、私たちは、誰の痛みを受け止めたのか。自分の属する共同体や国家を越えて、帝国主義／植民地支配と戦争という暴力を導いた人間の愚かさによって苦悩と痛みを被ったすべての存在の痛みの声を聴く耳は備わっていたのかどうか、この時、深く顧みる者でありたいと思います。

＜日韓条約60年をめぐって＞

60年前に二つの国民国家の間に締結された条約の意味をともに噛み締めたいと思います。日本は植民地支配の「補償」という言葉を忌避し、「経済支援」という名分にこだわり、韓国は「経済優先」の必要に迫られ、ついには曖昧な妥協に至りました。このことによって、日本は歴史修正の勢いがつき、韓国は独裁政権の正当化に繋がったこと、そして、その後の分断をさらに深刻にしたことの意味を、また、「補償」ではなく「経済支援」という表現に固執したことにより、深い傷を追った個人の痛みが不問に付される道を築いてしまったことの意味を、ともに噛み締めたいと思います。その淵源には、朝鮮半島の北側を無視し、「朝鮮籍」として取り残された存在に対して、「煮て食おうが焼いて食おうが自由」との国家の意志が横たわっていたこと、そして「日韓」の双方にそのことに対する深い悔い改めが不在であったことを、ともに記憶したいと思います。

＜この地と彼の地に積み重なった戦争をめぐって＞

「安らかに眠って下さい　過ちは繰返しませぬから」と刻まれた広島の原爆慰霊碑。「ベトナム戦争中に韓国軍が引き起こした虐殺事件に謝罪するため」に済州島の聖フランシスコセンターに建てられたピエタ像。自らを射抜く、この二つの碑が指し示す心の深さを、いま、この時、ともに胸に覚えることができる私たちでありたいと思います。併せて、朝鮮戦争を、この地の経済発展の契機として「特需」と認識してきたことへの深い悔い改めを共有するとともに、パレスティナなどで起きているジェノサイドを結果として見て見ぬふりをしてしまっている私たちが想像力を取り戻し、「世界には自分とは違う痛みがある」ことを痛切に感じることができる者でありたいと思います。

＜ヘイトをめぐって＞

在日コリアンをめがけたヘイト・スピーチやヘイトクライム、そしてクルド人に向けて最も過激な矛先を向ける敵意が存在します。その敵意を後押しするような国会議員の言説が湧出する危機を、ともに危機と明らかに認識したいと思います。しかるべき法的措置がなされることの働きかけをおこなうとともに、「ともに生きる」ことと、「誰かを排斥する」ことの分岐点はなぜ現れたのか、「ともに生きる」道を歩むキリスト者の道はどのように整えられるべきか、祈りのなかで、ともに模索する私たちでありたいと思います。この道は、いまも暴力にさらされている沖縄の民の苦悩や、原発事故の傷などなかったことにされつつあるように思われる福島の人々の痛みを、「はらわたがちぎれる思い」をもって共感された／「深く憐れまれた」（マタイ9・36）イエス・キリストのからだに連なる道であると信じます。

＜貧困と格差、蔓延する不遇感のなかで＞

物価の高騰、給与の目減り、就職氷河期を生きた人々の抑圧された生に見られるように、多くの人が、いままでになく明るい明日を予測できない不安を感じながら、「わたしだって可愛そうなんです」とつぶやくような社会に、私たちは生きています。そのなかで、蔓延する「自己責任」という言葉を、人々はいつのまにか内面化し、「ともに生きる」道を自ら遮断しているのではないでしょうか。SNS上に繰り広げられる薄っぺらな記号のような「コトバ」の氾濫のなかで、人々が敵意によって不安を満たすことが起きているとしたら、キリスト者の道は、そのような「コトバ」がもたらす不安の似非の「解消」ではなく、真の「平和」をもたらす、「いのち」の「ことば」を届けることであると信じます。

私たちは、いま、この時、イエス・キリストの洗足の身振り（ヨハネ13）をともに想起したいと思います。生活の中で最も汚れた部位である足を洗うということ。それは、汚れた部位を指摘して非難し分断を深めるのではなく、その部位を洗い合うことによって、自らの汚れに気づき、悔い改めを忘却する身振りを離れて、新たな道に進むからだを整えることと信じます。「日韓」という国民国家のアイデンティティを背負い／背負わされつつも、私たちが背負うべき悔い改めの忘却という責任を引き受け、イエス・キリストの十字架の贖いに値する生を、「いま、ここ」から、再び、新たに、ともに紡いでゆきたいと思います。

▼宣教委員会▲

青年大会開催方法を協議

後列左より、堀川樹、具志堅篤、須賀工、真壁巌各委員、小林克哉委員長、中西真二（伝道）委員、小宮山剛書記
前列左より、キスト岡崎さゆ里（全国教会婦人会連合）、横山ゆずり（教育）、秋間文子（社会）、鈴木善姫（伝道）各委員

今総会期宣教委員会は、第1回（4月14日）および第2回（6月25日）委員会を開いた。

青年大会実行委員会についてのみ報告すると、委員長を須賀工委員とすること、また教育・伝道・社会の各常設専門委員会からそれぞれ1名を委員として出すことを決めた。

開催方法については、昨年9月に開催した青年大会が全国6会場に分かれてオンラインでつなぐ形でなされ、参加した青年がそれぞれの地域でつながりを持つなどの成果があったことを評価し、次回となる来年も同様の形で行うことを確認し、日程の調整に入ることとした。また、情報が必ずしも諸教会に届いているとは言えないことから、どのように広がりを作っていったらよいかについて検討している。

（小宮山剛報）

寄せ場からの声

《寿炊き出しの会》

分断をのりこえる場として

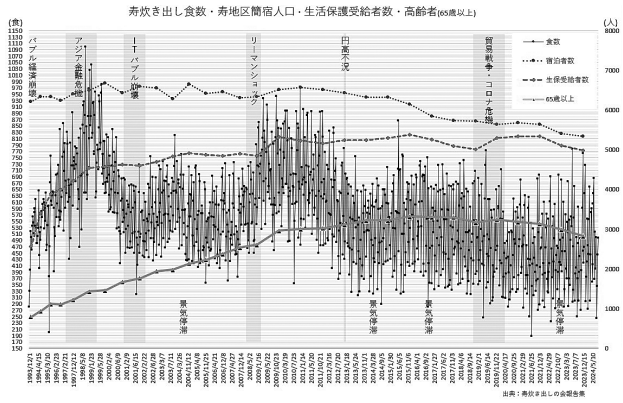
8月以外毎週金曜日に寿公園で行っている寿炊き出しの会は、日雇い労働者の先達である「老人クラブ」の声がけで1993年12月から始まり現在第33次に入っている。バブル経済崩壊の不景気が労働者の町に直撃し、公的資料ではないものの当時の記録によると寿地区および周辺での行路病死は1993年には184人。今では「寿の人」と言えば簡易宿泊所に住んでいる人を連想する人が多いが、当時日雇い労働者にとって野宿生活は地続きの問題。まさに「命の灯」を守る活動としての炊き出し。時代だけの場にあらず、身寄りなど人的関係性の乏しい困窮者が新たにつながりを構築する「場」の一助になっていると感じている。

また、昨年より学校や教会などの団体による炊き出し参加が増加傾向にあり、炊き出し後のふりかえり会での感想で交流を通じて「ホームレスの人がはじめて人だとわかった」（要約）と、学生から素直な感想があった。この〝出会い〟はとても大事なことだ。

初めて無料の食事を必要としている人がこの日本にいることの実感と現状、そして自らがもっている偏見に気が付き「学びなおし」「出会いなおし」を果たす「場」となることを願っている。

「悲しんでいるようで、常に喜び、貧しいようで、多くの人を富ませ、無一物のようで、すべてのものを所有しています」（コリントの信徒への手紙二6章10節）生きにくい世、新たな苦難の中、このことを実践として目の当たりにしていけるか問われているように思う。

（汀なるみ報／寿地区センター主事）



炊き出し食数推移グラフ

戦後80年にあたって、平和を求める祈り

今、心を一つにして、私たちの父なる神に祈ります。
「御名が崇められますように。御国が来ますように。御心が天になるごとく、地にもなりますように。」

アジア・太平洋戦争の敗戦から80年を迎えます。神が造られ、愛された何千万人もの命が、私たちの罪によって傷つけられ、奪われたことを深く悔い改め、人類が二度とあのような過ちを犯すことがないようにと、平和の主に祈り願います。

しかしこの80年の間にも、多くの戦争・内戦が世界中であり、今も1億人を超える人が難民とされています。私たちがまことに無力であったことを悔いるものです。この現実の中で、それでも私たちは復活の主がまことの平和へと世界を導いてくださることを信じ、心を新たにして平和を祈り願います。そして、御言葉を宣べ伝え、御国を目指して歩んで行きます。また、私たち自身が、戦時中に神と人とに対して大きな罪を犯したのみならず、その後も時代と共に変わりゆくイデオロギーや歴史観に振り回されたことを悔い改めます。主の御前に立って全ての者が悔い改め、ただ主の平和に仕える者となりますように。時代は変わり人は変わりますが、神の言葉は永遠に変わることがありません。正しいお方は、十字架の主であるあなただけです。主よ、憐れんでください。

近年は日本の近海においても緊張状態が続いています。その様な中で琉球弧の島々に住む方々が担わされている過重な労苦に対して痛みを覚えます。私たちが自分の利益だけを追い求めることなく、十字架の主イエス・キリストの御前に立って、神が与えられた力と知恵とを平和の実現のために用いてまいります。

私たちは、神の子・平和の子とされた者として、御国を仰ぎつつ祈ります。強い国家や民が、弱く小さな国家や民を力によって支配し、虐げることがありませんように。国家・民族の間にある憎しみの連鎖が断ち切られますように。困窮のただ中にある一人びとりに、生きる力と勇気が与えられますように。そして、核の脅威が世界中から取り除かれていきますように。
平和の主イエス・キリストよ、早く来てください。

この祈りを主イエス・キリストの御名によって祈ります。　アーメン

（第43総会期　第4回常議員会　2025年7月8日　可決）

事務局報

松本紳一郎（函館教会主任担任教師）
25年6月18日逝去、77歳。東京都生まれ。10年東京神学大学大学院修了、同年より函館教会を牧会。
遺族は妻・松本美香子さん。

甲賀道生（隠退教師）
25年6月22日逝去、92歳。満州・安東県生まれ。58年東京神学大学大学院修了、同年より洗足、江戸川教会を牧会し、09年隠退。
遺族は妻・甲賀淳子さん。

正教師登録
関戸直子、津村大三、長手陽介（2025・5・27受按）
髙木政臣（2025・6・1受按）
小倉仁史、進　宏一、細井宏一（2025・6・21受按）
阪口　選（2025・6・22受按）

補教師登録
藤田和也（2025・5・27受允）

池田昌功、増尾隆司（2025・6・1受允）
眞木重郎（2025・6・21受允）

教師異動
下石神井辞（代）古賀　博
〃　就（主）西間木公孝
江古田　就（代）古賀　博
吉祥寺　就（担）増尾隆司
拝島平安就（担）池田昌功
旭川六条辞（代）卜部康之
〃　就（主）山本光一
八雲　辞（主）反町潤平
〃　就（代）金　鍾九
七飯　辞（代）松本紳一郎
〃　就（主）榮　忍
南豊中　辞（担）床次隆志
天城　辞（主）吉田　慈
〃　就（主）床次隆志
琴浦　辞（代）吉田　慈
〃　就（代）床次隆志
彦根　就（主）吉田　慈
鳥取　辞（代）葛井義顕
日野　辞（兼主）野々川藍
〃　就（代）武石晃正
岡山　辞（担）佐々木玲哉
〃　就（担）藤田和也
仙台東　辞（代）近藤　誠
〃　就（主）佐々木玲哉
角田　辞（主）小松茂夫
〃　就（代）池田春善
横浜上倉田　辞（主）桒原道子
〃　就（代）加山久夫
相模原　辞（担）辻川　篤
〃　就（担）眞木重郎
フェリス女学院大学　辞（教）徳田　信
蒲田　辞（代）藤崎義宣
〃　就（主）徳田　信
山梨　辞（主）及川　信
静岡英和女学院中学高校　辞（教）武井裕賀里
畦野　辞（主）本宮　広
〃　辞（担）本宮真理
〃　就（代）橋本いずみ
高砂　辞（担）谷元亜衣
明石ベテル　辞（主）斎藤成二
〃　就（代）兼松千佳子
〃　就（担）斎藤成二
〃　就（担）谷元亜衣
横須賀学院中学高校　就（教）永瀬克彦
弘前南　辞（主）松村重雄
〃　就（代）松村枝美
弘前学院聖愛中学高校　就（教）朱　榮眞
新庄　辞（主）佐藤浩之
〃　就（代）原　裕
富山二番町　辞（代）渡部信子
〃　就（代）渡部和使
徳山　辞（代）足立麻子
〃　就（代）浦上　光
新居浜西部　辞（代）木村一雄
〃　就（主）本宮真理
〃　就（担）本宮　広

教師隠退
及川　信、涌井　徹、松村重雄

隠退より復帰
加山久夫

教会合併
宜野湾、志真志（ぎのわん教会設立）

伝道所廃止
京都上桂

教会所在地変更
葦のかご
〒151－0063　東京都渋谷区富ヶ谷1－35－9　ベテル教会

伝道所所在地変更
埼玉中国語
〒363－0028　桶川市下日出谷西3－15－34　桶川伝道所内

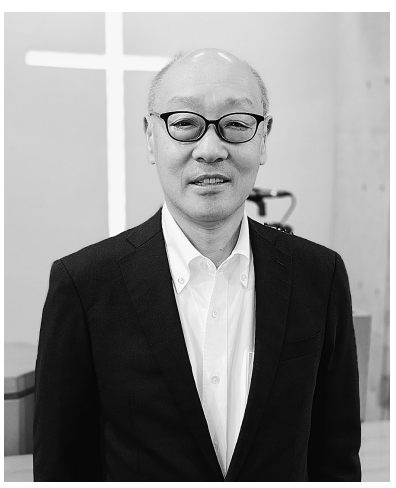
伝道所通信先削除
知立

信徒伝道者異動
明石ベテル就　谷元延幸

ひと　とき

星野（ほしの）　薫（かおる）さん

キリスト教学校を通して世に仕える



藤沢北教会員

フェリス女学院の職員として43年働いてきた星野薫さんは、藤沢北教会で受洗して46年になる。その間30年間長老を務めている。

教会との出会いは、転校先の公立小学校に藤沢北教会の教会学校に通っている生徒が何人かいたことだった。大学入学後ほぼ毎週礼拝に出るようになり、「この教会で礼拝者になる」との思いに導かれて受洗。それ以来藤沢北教会で礼拝をし、仕え続けている。

牧師の夫人にフェリス女学院を勧められて就職。それ以来事務職員として学生、生徒を支えることを通して日本の宣教に仕えてきた。フェリス女学院のモットーは「For Others」。学生、生徒、卒業生に親しまれ、職員にとってもこの学校で働く指針になっている。

6年前からキリスト教学校教育同盟の全国事務局長・事務長会議の実行委員長を務め、キリスト教学校のあり方を考えさせられることも多い。「キリスト教学校は日本社会に受け入れられ、信頼されてきた。聖書に基づく人格教育や奉仕の精神が評価され、宣教師の存在もあって英語教育、国際性・多文化理解などを特色としてきた。しかし、今日、それらはキリスト教学校だけの特色ではなくなり、急激な少子化の中にあって伝統を守るだけでは生き残ることができない。特に女子教育の存在意義が問われている」とし、その上で、「今の社会の要請に応えるだけではなく、学生、生徒が生きていくこれからの社会がどうなっていくのか、そのためにどのような学びを提供できるかを考え、社会に発信していかなければならないと考える」と語る。

フェリスでのキャリアを終えようとする今、十分に責任を果たしたかと自らに問いつつ、次の世代の職員にバトンを渡そうとしている。

究極のリラックス

26名の新任教師を迎えて新任教師オリエンテーションが開催された。共に学ぶ機会が与えられていることを嬉しく思う。

参加者がリラックスできるよう教師委員の皆様がプログラムの進行など工夫してくださっている。力を抜くのも大切だ。

三日間を通して多くの恵みが与えられた。講演・礼拝・分団等に共通するのは「自分の力で成し遂げるのではなく、神さまの力にお委ねする」ことであったと思う。召命に応えて献身したひとり一人をどうお用いになるか神さまの御手の内にある。

求道中、現役の会社員で教会の役員もしている方の証しを聞いた。「人事を尽くして天命を待つと言うが、クリスチャンは逆だ。天命が決まっているから安心して人事を尽くすことが出来る」。恣意的に何かを進めようとしても主のみこころでなければその計画は滅びる。この信仰を与えられているから大胆に力を尽くすことが出来る。主の十字架の贖いにより罪赦されて、行く道も主が伴い、行先もひとつ。

信徒も教職もふっと自分の力が抜けたところに神さまの力が大いに現れることを経験しているのではないか。歯を食いしばるようなときもある。それでも、親に抱かれて安心して眠る幼子のように限りない平安の中にあることを礼拝で共に確認しながら、遣わされた場所で与えられた働きをしていきたいと願う。

（教団総幹事　網中彰子）